

2019年全国高等学校総合体育大会入賞選手を対象としたアンケート調査 —相対的年齢効果や運動・スポーツ歴に注目して—

渡邊將司¹⁾ 上地 勝¹⁾ 森丘保典²⁾ 須永美歌子³⁾ 貴嶋孝太⁴⁾ 真鍋知宏⁵⁾
山本宏明⁶⁾ 酒井健介⁷⁾ 杉田正明³⁾

- 1) 茨城大学教育学部 2) 日本大学スポーツ科学部 3) 日本体育大学体育学部
4) 大阪体育大学体育学部 5) 慶應義塾大学スポーツ医学研究センター
6) 北里大学メディカルセンター 7) 城西国際大学薬学部

はじめに

日本陸上競技連盟は、全国高等学校総合体育大会(インターハイ)の入賞者を対象にアンケート調査を実施してきた。この調査の意義は、高校トップ選手達の運動・スポーツ歴、生活・食習慣(サプリメント摂取)、心身のコンディショニング、既往歴などを知ること、高校生競技者の競技力向上や競技人口拡大に向けての有益な情報を得ることにある。

本稿では、2019年度に開催されたインターハイで入賞した選手の相対年齢効果および運動・スポーツ歴等について報告するとともに、2017年度及び2018年度のデータと比較する。

方法

対象は2019年度インターハイの陸上競技入賞者424名であった。表彰式終了後に、本調査の目的を文書で説明した。アンケートは無記名式で、郵送でもって後日回収した。得られたサンプルは男子50名、女子55名であった(回収率24.8%)。表1には、分析対象者の特徴を示した。2017年度と2018年度のデータはすでに報告された結果から引用した(森丘ほか2017, 2018)。

結果と考察

表2は、分析対象者の誕生月分布である。全体的

表1 分析対象者の特徴

		学年(年)	身長(cm)	体重(kg)	競技開始年齢(歳)
男子(n=50)	平均値±標準偏差	2.6±0.5	175.4±6.5	68.3±14.1	12.6±2.1
	最大値	3	190	107	16
	最小値	1	162	49	7
女子(n=55)	平均値±標準偏差	2.7±0.6	162.9±5.7	55.1±11.3	12.3±1.8
	最大値	3	178	91	16
	最小値	1	153	39	7

表2 分析対象者の誕生月分布

	男子(%)			女子(%)		
	2017	2018	2019	2017	2018	2019
4-6月	29.6	31.7	34.0	24.1	28.1	32.7
7-9月	29.6	36.6	36.0	29.9	26.0	20.0
10-12月	27.2	14.9	16.0	29.9	22.9	16.4
1-3月	13.6	16.8	14.0	16.1	22.9	30.9

4月1日生は1-3月に含まれる

表3 多様なスポーツ経験に対する肯定感

	男子(%)			女子(%)		
	2017	2018	2019	2017	2018	2019
大変役に立った	32.9	38.1	35.6	42.9	48.8	54.3
役に立った	38.6	40.5	37.8	40.0	35.7	39.1
どちらともいえない	22.9	19.0	17.8	14.3	14.3	6.5
役に立たなかった	5.7	2.4	6.7	2.9	1.2	0.0
全く役に立たなかった	0.0	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0

表4 子どもの頃の運動遊び頻度

	男子(%)			女子(%)		
	2017	2018	2019	2017	2018	2019
よく遊んでいた	81.8	83.2	88.9	86.3	86.3	77.6
普通	16.9	15.8	8.9	12.5	11.6	20.4
あまり遊んでいなかった	1.3	1.1	2.2	1.3	2.1	2.0

に見て、4-6月生が多く1-3月生が少ないことが窺える。その傾向は女子より男子の方が強い。2019年度に関しては、女子において1-3月生の割合が30.9%とこれまでよりも高い割合を示したことが特徴と言えよう。その背景にはインターハイ以外の大会の年齢区分の変更が挙げられるかもしれない。2018年度からU20・U18日本選手権（旧日本ジュニア・ユース選手権）やジュニアオリンピックの年齢区分が、4月2日～4月1日（つまり学年）から、1月1日～12月31日に変更された。その変更により、学年区分では最も年齢の低かった1～3月生者が最も年齢が高くなった。これまで全国レベルでなかなか活躍できなかった選手がインターハイ以外の全国大会で経験や自信を獲得して入賞につながったのかもしれない。この点については、今後も注視していく必要があるだろう。

表3は、多様なスポーツに対する肯定感の分布である。2019年度は男子で73.4%、女子で93.4%が「大変役に立った」「役に立った」と回答しており、その傾向は年によって大きな差がない。多様な運動経験が役に立ったと感じる理由として2つ挙げられる。1つは種目選択である。走・跳・投運動は、多くのスポーツにおいては「手段」であるが、陸上競技では「目的」となる。様々なスポーツを経験する中で、「走る能力が優れている」「投げる能力が優れている」等を感じ、自分の特性に合った陸上競技を選択できたという考え方である。もう1つは、運動の応用・洗練である。種目は異なっても体力要素が似ているスポーツは複数ある。例えばバスケットボールやサッカーでは高い持久力が要求されるた

め、長距離走で役に立つだろうし、器械体操を通して修得した身体操作能力は棒高跳びで役に立つだろう。しかし、どのように役に立つのかはアンケートで尋ねていなかったもので上記の理由は推測に過ぎない。今後、詳細な調査が必要であろう。

表4は、子どもの頃の運動遊び頻度である。2019年度は男子で88.9%、女子では77.6%が「よく遊んでいた」と回答しており、その傾向は年によって大きな差がない。これは日本代表選手を対象にして実施した調査結果と似ている（渡邊ほか 2015）。将来的に全国トップクラスに至るにあたって子どもの頃の運動遊びは重要な要素の1つなのかもしれない。運動遊びは、様々な体力・運動能力の獲得に貢献するだけでなく、他者と協力すること、逆境を乗り越える力（レジリエンス）など、精神的な成長にも貢献する（引原ほか 2018）。特に大人が関与しない非組織的な遊びでは、子ども達だけでルールを作ったり工夫することも多い。しかし、非組織的な遊びができる環境や機会が乏しいのが現状である。これに関しては大人が整備しなければならないことであろう。

表5は、小学校期の運動有能感の分布である。2019年度において短距離走と持久走は50%以上の者が「速かったと思う」と回答していた。一方で跳躍力と投能力は「普通だった」と回答するものが多かった。この傾向は他の年もほぼ同じであるが、跳躍力が「高かったと思う」と回答した者の割合が低下した点はこれまでと異なる。走る行為は様々な運動場面で現れるため、小学生の時には多くの者が自身の走能力の高さを感じていたものと思われる。跳

表5 小学校期の運動有能感

	男子(%)			女子(%)			
	2017	2018	2019	2017	2018	2019	
短距離走	速かったと思う	62.8	69.7	62.0	83.9	88.4	74.5
	普通だったと思う	23.1	26.0	24.0	11.5	10.5	21.8
	遅かったと思う	14.1	4.0	14.0	4.6	1.1	3.6
持久走	速かったと思う	46.2	50.5	56.0	64.4	62.1	61.8
	普通だったと思う	30.8	33.3	24.0	27.6	29.5	21.8
	遅かったと思う	23.1	16.2	20.0	8.0	8.4	16.4
跳能力	高かったと思う	57.7	51.5	48.0	49.4	63.2	43.6
	普通だったと思う	28.2	38.4	40.0	41.4	32.6	49.1
	低かったと思う	14.1	10.1	12.0	9.2	4.2	7.3
投能力	高かったと思う	33.3	33.3	26.0	39.1	43.8	25.5
	普通だったと思う	47.4	44.4	44.0	28.7	33.3	45.5
	低かったと思う	19.2	22.2	30.0	32.2	22.9	29.1

表6 競技開始の動機（内的要因）

	男子(%)			女子(%)		
	2017	2018	2019	2017	2018	2019
自分に合った競技だと思ったから	54.3	46.0	66.0	54.0	57.3	57.4
楽しそうで面白そうだったから	42.0	42.0	46.0	48.3	56.3	61.1
ただ何となく	22.2	20.0	0.0	18.4	18.8	0.0
かっこよく見えたから	13.6	19.0	18.0	20.7	14.6	22.2
うまくなれそうだったから	14.8	14.0	14.0	17.2	12.5	14.8
一流選手になれると思ったから	3.7	9.0	14.0	3.4	3.1	7.4
自分を鍛えるのに良い競技だと思ったから	11.1	8.0	8.0	8.0	4.2	7.4
その他	8.6	10.0	10.0	10.3	16.7	14.8

複数回答可

能力は、走運動より他者と比較する場面が限定的であるため、自分が優れているのかどうかを感じる機会が少なく「普通」と回答した者が多かったのかもしれない。投運動は走・跳運動と運動形態が全く異なるため、別な要素と考えられる。つまり、走ったり跳んだりすることは得意でも投げるのは苦手というパターンがあるということであるが、2019年度はこれまでよりも投能力が「高かったと思う」と感じていた者の割合が低下した。子どもの体力低下に関しては以前から指摘されているが、投能力の低下は他の項目よりも著しい。その結果を反映している可能性もある。

表6は、競技開始の動機（内的要因）の分布である。「自分に合った競技だと思ったから」や「楽しそうで面白そうだから」という項目の割合が高いのはどの年も変わらない。しかし2019年度では「ただ何となく」という項目を回答した者がいなかった。

その代わり他の項目で割合を増やしているものがあることから、陸上競技を始める内的な動機がやや明確になっているのではないかと考えられる。

表7は、競技開始の動機（外的要因）の分布である。2019年度は男女とも「指導者やコーチにすすめられて」と回答している者の割合が最も高く、他の年も同様の傾向であった。しかし2019年度は「先輩や友達にすすめられて」の割合が低下した一方で「母親にすすめられて」「父親にすすめられて」「直接、試合をみて」の割合が高まっていた。また、女子では「兄弟にすすめられて」の割合が高まったことから、陸上競技を始めるにあたって、家族の影響が強まっている可能性が考えられる。つまり、何らかのきっかけで陸上競技の試合を家族と見て、本人が魅力や適性を感じたことに加えて、家族に勧められるといった働きかけが増えているのかもしれない。つまり、陸上競技の普及活動が将来的な選手発掘・育

表7 競技開始の動機（外的要因）

	男子(%)			女子(%)		
	2017	2018	2019	2017	2018	2019
指導者やコーチにすすめられて	30.9	34.7	34.0	35.6	34.4	29.1
先輩や友人にすすめられて	23.5	23.5	18.0	20.7	25.0	10.9
学校の先生にすすめられて	19.8	21.4	10.0	19.5	28.1	20.0
母親にすすめられて	13.6	17.3	16.0	26.4	19.8	25.5
父親にすすめられて	19.8	16.3	20.0	16.0	17.7	21.8
特にきっかけはない	18.5	16.3	24.0	16.1	11.5	16.4
直接、試合を見て	14.8	11.2	16.0	9.2	9.4	16.4
テレビ、新聞、雑誌などの情報によって	8.6	10.2	8.0	6.9	3.1	1.8
兄弟にすすめられて	9.9	8.2	2.0	13.8	15.6	18.2
親戚にすすめられて	2.5	4.1	2.0	1.1	2.1	1.8
タレント発掘事業に参加して	-	0.0	0.0	-	1.0	0.0
その他	6.2	1.0	8.0	3.4	3.1	3.6

複数回答可

成につながる可能性を示唆している。

おわりに

インターハイで入賞するような高いレベルの競技者は、幼い頃から専門的にというよりも様々な遊びやスポーツ活動の中から自分に合ったスポーツとして選択していった経緯を窺うことができた。その背景には、本人が高い有能感を持っていたり、彼らの適性を見出すことができた人々に出会えたという運もあったのかもしれない。一連の調査で、選手の特徴は様々であることがわかり、全国でトップクラスに至るまでの決定的な条件を発見することはできなかった。

今回の調査は回収率が24.8%と低く、以前の調査でも50%前後であった。また比較となるデータを収集していなかったことから、インターハイに入賞する選手とそうでない選手との違いを明らかにすることはできなかった。今後は、回収率を高める具体的な方策を考えるとともに調査対象を拡大する必要があるだろう。

参考文献

- 引原 有輝, 渡邊 将司, 川勝 佐希, 石井 好二郎 (2018) 子どもにおける運動・スポーツ活動と運動遊びの意義とはーヘルスアウトカムとの関連から探るー. 体力科学, 67 (1) : 83-98.
- 森丘保典, 須永美歌子, 貴嶋孝太, 真鍋知宏, 山本宏明, 酒井健介, 杉田正明 (2017) 2017年全国

- 高等学校総合体育大会入賞選手を対象としたアンケート調査ー相対的年齢効果や運動・スポーツ歴に注目してー. 陸上競技研究紀要, 13 : 231-233.
- 森丘保典, 須永美歌子, 貴嶋孝太, 真鍋知宏, 山本宏明, 酒井健介, 杉田正明 (2018) 2018年全国高等学校総合体育大会入賞選手を対象としたアンケート調査ー相対的年齢効果や運動・スポーツ歴に注目してー. 陸上競技研究紀要, 14 : 220-223.
- 渡邊将司, 森丘保典, 伊藤静夫, 三宅聡, 繁田進, 尾縣貢 (2015) 日本代表選手の青少年期における運動遊び経験およびトレーニング環境ー日本代表選手を対象にした軌跡調査ー. 陸上競技研究紀要, 11 : 4-15.